私がみた坂の上の雲
―第２弾―

心臓血管外科　部長　中尾達也

新心会の皆様、新年明けましておめでとうございます。心臓血管外科部長の中尾達也です。広島から千葉に来て今年ではや４回目のお正月を迎えました。大学１年生になった娘が大学卒業を迎えるという年月の流れを、周囲を畑で囲まれた和名ケ谷の新東京病院新病棟で感じた２０１３年のお正月でした。

さて50代になって、自分のこの先の事を少し考え始めないといけないかな？と思っていたところ、昨年の暮れ、手術中の朝に広島から電話がありました。78歳になる母親が救急車で病院に運ばれたと。実は私の父親が62歳で亡くなった時も、オーストラリアの病院で手術中の朝、日本から電話がかかり、父の訃報を知り帰国した経験があるので、手術が終わるまではいろんな不吉な予感を抱きながら、手術が終わるやいなやすぐに運ばれた救急病院に電話をしました。前回（昨年の新年号会報誌67号で）第１弾で紹介したように広島の実家に一人で住んでいる母はここ2～3年で痴呆が進んでおり、そのせいか昨年の初め頃から母の身の周りにいろんな災いが次から次へと降りかかりました。一人暮らしの老人目当てのカード詐欺や、実家のリフォーム詐欺などです。さらに、脚が丈夫な時の母は、以前は週3回、海宝寺というお寺さんに父と大おばあさんのお墓参りに乳母車を押して行くのが日課でしたが、最近ではお寺さんに行くも、お墓までの階段を一歩一歩這い上がるように昇って行っていたそうです。母の頭や体の老いをひどく感じていたところに今回の広島からの電話でした。その電話の内容は次のようでした。

現在母親は介護保険のデイサービスを週3回、月、水、金に利用していましたが、土曜日の昼に新聞紙の上で足を滑らせ、玄関の土間で転倒。全く動けなくなり、寒い土間の台所で月曜日の朝、訪問してきたデイサービスの職員に発見されるまで、這いつくばり、もがきまわった後に意識消失していたそうです。運ばれた救急病院の診断は、右大腿骨頸部骨折、全身打撲衰弱でした。幸い母の意識は戻り、すぐに私の大学のテニス部の後輩（整形外科医）がいる病院に連絡を取ると、翌日には転院して、その週に手術をして頂きました。

帰広して麻酔が切れかかった病床の母親に会った不肖な息子に「真っ暗な倉庫に閉じ込められて怖かった」「大おばあさんやお父さんに加え私や弟が次々と会いにきてくれ頑張れと励まし語りかけてくれたんじゃけぇ」と、か細い声で話してくれました。

母親は、亡くなった父や大おばあさんに語りかけるように墓前で毎日お経を10分近く暗唱していました。その母親の想い、すなわち相手が亡くなっていても、その人達をいつまでも敬い大切にする気持ちを持ち続けていたことが、今回、生死の時空を超えて彼女を瀕死の状態から救いだしてくれたのかもしれません。

現在、私の同級生がやっている施設に入所してリハビリに励んでいる母親を見舞いに行くたびに、必ずや次の世代が背負わなければならない親の老いと付き合うにはどうすればいいか、すなわち親の介護の肉体的、精神的、金銭的負担をいかに分担軽減した上で、さらに満足度の高い介護を実現するかを模索中です。

前回（昨年の新年号会報誌67号で）、司馬遼太郎がいう坂の上の雲とは、目の前に高い理想という登るべき坂があり、その坂を登ったところには輝かしく白雲が日に照らされていたという意味ではないかと書きました。

しかし、50歳になり登ってきた坂の上には、新たな母親の介護という息子として当然背負わなければならない坂が待っていました。不自由な足でも父の墓に向かうお寺の坂の階段を這い上がるように登っていった、先人に対する母の一途な想い、土間で一昼夜半這いずりもがいた末に意識消失しながらも、生きていてくれた母の生命力を考えると、これらの事は母から不肖な息子への生きることに対する教えなのでしょうか。増え続ける多くのものを背負いながら、いつまでも坂を登り続けることが出来なくなり、いつしか坂を下って行くのでしょう。

でも、人生、坂をゆっくり下ることの方が難しいのかもしれません。

さて、今年になり宮城県警察本部から感謝状の表彰授与式があるので1月25日に宮城に来てほしいと要請がありました。痴漢や泥棒を捕まえたわけではなく、宮城県内の医療事故裁判の鑑定貢献に対しての表彰だそうです。

被災地には東日本大震災後に必ず一度は足を運ばなければとずっと思っていました。昨年の新心会旅行では行けませんでしたが、思いが通じたのか、あるいはご縁があって呼んでくれたんだなと思いました。なぜここまで被災地に行きたいと思うのかは2つの理由があります。

1つ目の理由です。以前もご紹介いたしましたが、遡ること震災の1ヶ月前に広島で、「命輝いて、被爆セーラー服の涙」という本が出版され、本のモデルになった女性河内さん（写真①）は、後年被爆2世である私が心臓バイパス手術をさせていただき、一部、本の中に心臓手術に関しての文章を加えさせて頂きました。東日本大震災でも原爆が投下された広島でも、多くの人々が一瞬のうちに不条理にその生を絶たれてしまいました。さらに新聞の一面に載った震災とそれに続く津波に襲われた福島の写真と、この本に載っている原爆を落とされた直後に写された広島の写真はひどく似通っていました。放射能被害に関して、両親が被爆にあっている私にとっては幼少期からいろんな想いを抱いておりました。原爆が遠い存在であった東の人の想いと、震災が遠い出来事である西の人の想いが、時空を超えて重なりあう気持ちになれるのではないかとの予感を抱いております。

写真①

2つ目の理由です。私が16年前シドニーの病院にいる時に心臓手術をさせて頂いた気仙沼の遠洋漁業の漁師（当時48歳）で、未曽有の東日本大震災による津波からも生還し、現在もお元気でいらっしゃる菅野さんとそのご家族に、今回の訪問でお会い出来ることになったのです。なんと奇遇なことに、菅野さんの娘さんは地元警察学校を卒業し、現在宮城県警に勤務されています。時を越えてのご縁を深く感じております。シドニーの病院で手術をした私も、手術を受けていただいた菅野さんも、異国の土地での手術から16年後に、しかも不条理な震災の後にまた再会出来る日が訪れるとは、思いもよらない事です。震災後に、なにかしらわだかまりの如く私が抱いていた暗く重い思いに一条の光を差し込んで頂いたようです。

以前、私が登る坂は医療人としての3つの坂があると書きました。

すなわち医学それに携わる医療人には、Science（科学）、Art（技術）、Humanity（人間性）の3つの要素（修練坂）が必要とされていると。医者になって25年、振り返れば人として、医療人として、心臓外科医として、私の母、他の分野の方々、多くの患者さんから未だ学ぶことがいかに多いことかと。

さらに今までの思いがけない出会い、ご縁は時空、想像を超えた新しい境地をいつも拓いてくれました。

昨年、私が手術をさせて頂いた茨城の書道家である愚想庵　楊　希風さんから頂いた書（写真②）を紹介させて頂きます。

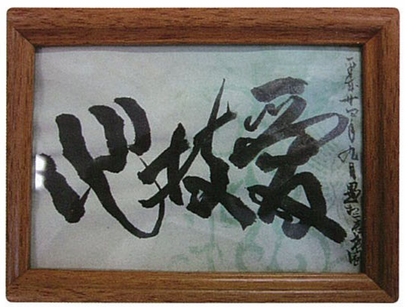
「先生にはこれがお似合いだね」と言って頂きました。

「心技愛」

これが今後、私の目指す新たな3つの坂（上りも下りも）でしょうか。

いつでも人生に感謝！いつまでも人生は修行！です。

本年も宜しくお願い致します。



写真②